令和七年度　前期日程
入学者選抜学力検査問題　国　語

〔注　意〕

1　机上に受験票を提示しておくこと。

2　監督者の指示があるまで、この冊子を開いてはいけない。

3　解答は必ず別紙の解答用紙の指定された箇所に記入すること。

4　解答用紙に受験番号・氏名を必ず記入すること。受験番号・氏名が記載されていない答案は無効となる場合がある。

5　この冊子の問題は十ページ、解答用紙は一枚からなっている。

6　この冊子のうちに落丁・乱丁、印刷不鮮明な箇所があれば、手をあげて申し出ること。

7　この問題の内容に関する質問には答えない。

8　この問題の満点は一〇〇点である。文学部日本・中国文化学科は四〇〇点に、文学部国際文化交流学科・歴史学科・公共政策学部および農学食科学部和食文化科学科Ａは二〇〇点に換算する。

9　字数制限のある解答では、句読点や括弧なども字数に含める。

10　試験時間中の退出は認めない。

11　問題は持ち帰ること。

一

次の文章をよく読んで、後の問いに答えよ。なお、設問の都合で文章の一部を省略し、表記を改めたところがある。（40点）

（著作権の関係で不掲載）

（著作権の関係で不掲載）

（著作権の関係で不掲載）

（著作権の関係で不掲載）

（著作権の関係で不掲載）

（佐藤健二『ケータイ化する日本語――モバイル時代の〝感じる〟〝伝える〟〝考える〟』による）

（注）○『メディアとしての電話』……社会学の研究者である吉見俊哉・若林幹夫・水越伸による書籍。一九九二年刊行。　○親子電話……固定電話で、回線に直接接続する親機に子機が付属するもの。　○コードレス電話……固定電話で受話器がコードレスのもの。

問一　傍線部①～⑧のカタカナについて、楷書の漢字に改めよ。

問二　傍線部A「無意味化」とあるが、何の、どのような意味が希薄になったといっているのか、簡潔に説明せよ。

問三　筆者は、文中で引用された文章に対して、二重傍線部Ⅰ「電話での会話を支える意識」、Ⅱ「回線上の場」という二点において、さらなる検討が必要であると述べている。この二点についての筆者の意見を、引用された文章との違いがわかるように、簡潔にまとめよ。

問四　傍線部B「電話の移動」とあるが、筆者は、ここでいう「電話の移動」の背景に、どのような事態があったと考えているか、文章全体の趣旨をふまえて、一五〇字程度でわかりやすく説明せよ。

二

次の文章は、鴨長明の歌論の一部である。これをよく読んで、後の問いに答えよ。（30点）

光行、賀茂社の歌合とて侍りし時、予、月の歌に、

石川や瀬見の小川の清ければ月も流れをたづねてぞすむ

と詠みて侍りしを、判者にて師光入道、「かかる川やはある」とて、負けになり侍りにき。思ふところありて詠みて侍りしかど、かくなりにしかば、いぶかしく覚え侍りしほどに、「その度の判者、すべて心得ぬこと多かり」とて、また改めて顕昭法師に判せさせ侍りし時、この歌の所に判していはく、「『石川・瀬見の小川』、いとも聞き及び侍らず。ただし、をかしく続けたり。ア かかる川などの侍るにや。所の者に尋ねて定むべし」とて、ことをきらず。

後に顕昭に会ひたりし時、このこと語り出でて、「これは賀茂川の異名なり。当社の縁起に侍り」と申ししかば、驚きて、「かしこくぞおして難ぜず侍りける。さりとも、顕昭等が聞き及ばぬ名所あらむやはと思ひて、ややもせば難じつべく覚え侍りしかど、誰が歌とは知らねど、歌ざまのよろしく見えしかば、ところおきてさやうに申して侍りしなり。これすでに老の功なり」となむ申A し侍りし。

その後、このことを聞きて、禰宜祐兼大きに難じ侍りき。「かやうのことは、いみじからむ晴の会、もしは国王・大臣の御前などにてこそ詠まめ、かかる褻事に詠みたる、無念なることなり」と申し侍りしほどに、隆信朝臣この川を詠む。また顕昭法師、左大将家の百首の歌合の時、これを詠む。祐兼いはく、「さればこそ。われいみじく詠み出だされたりと思はれたれど、代の末には、いづれか先なりけむ、人はいかでか知らむ。何となくまぎれてイ やみぬべかめり」と本意ながら侍りしを、新古今撰ばれし時、この歌入れられたり。いと人も知らぬことなるを、取り申す人などの侍りけるにや。すべてこの度の集に十首入りて侍り。これ過分の面目なるうちにも、この歌の入りて侍るが、生死の余執ともなるばかりうれしく侍るなり。ウ あはれ無益のことどもかな。

（『無名抄』による）

（注）○光行……源光行。平安末・鎌倉初期の歌人。　○賀茂社……上賀茂神社と下鴨神社の総称。著者は下鴨神社の神職の子であった。　○歌合……和歌を左右に分けて一首ずつ組み合わせ、判者が批評し、優劣を争う行事。作者名は伏せられていた。　○師光……源師光。平安末・鎌倉初期の歌人。　○顕昭……平安末・鎌倉初期の歌人、歌学者。　○ことをきらず……決着をつけなかった。　○当社の縁起……賀茂神社の由来を記した書。　○おして……積極的に。　○ところおきて……遠慮して。　○禰宜祐兼……下鴨神社の神職である鴨祐兼。　○隆信……藤原隆信。平安末・鎌倉初期の歌人、画家。　○新古今……『新古今和歌集』。　○取り申す人……取り立てて言った人。　○生死の余執……死後になお残る執着。出家した著者の立場からすれば本来よくないことだが、心情を強調する表現として用いられている。

問一　傍線部ア～ウを、文脈を考えながら、現代語訳せよ。

問二　傍線部A・Bについて、動作の主体である人物の名を、それぞれ記せ。

問三　二重傍線部「老の功なり」について、

(1)　誰の、どのような行動について述べたものか。具体的に記せ。

(2)　それがどのような結果となったのか。わかりやすく記せ。

問四　波線部「生死の余執ともなるばかりうれしく侍るなり」とあるが、そのように感じたのはなぜか。文章の内容に即してわかりやすく説明せよ。

三　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。なお、設問の都合で返り点・送りがなを省略したところがある。（30点）

資州去城五十里、曰三山村、地産茅香絶佳、草木参天。豺虎縦横、A人莫敢近。乳医趙十五嫂者、所居相距三十里。一夕黄昏後、聞人扣門請収生。①遽従以行。趙歩稍遅、其人負之而去。語曰、「只閉眼、聴我所之。切②勿問」。登高渉険、奔馳如風、趙③不勝驚顫。至石崖下、謂趙曰、「吾乃虎也。B汝不須怖。吾平生不傷人、遇神仙、授以至法。在山修持已三百年、今能変化不測。縁吾妻臨蓐危困、叫号累日、知媼善此伎、所以相邀。儻能保全母子、C当以黄金五両謝」。便引入洞中、具酒食、見牝虎委頓且跪。趙慰勉之、於洞外摘嫩薬数葉、揉砕窒其鼻、牝噴嚏数声、旋産三子。其夫即負趙帰。

明夜、戸外有人云、「謝④爾救我妻。出此一里、他虎傷一僧。便袋内有金五両。D可往取之」。黎明而往、如言得金。

（『夷堅志補』による）

（注）○資州……州名。現在の四川省中東部。　○茅香……香草の一種。　○参天……天に届くほど高いさま。　○豺虎……山犬や虎。　○乳医趙十五嫂……助産師の趙さん。「乳医」は産婆。現代で言う助産師。「十五」は親族間での長幼の順序が十五番目であったことを指す。「嫂」は既婚の女性について言う。　○収生……子を分娩させること。　○聴我所之……私が行こうとするところを受け入れてほしい。　○驚顫……おどろきふるえる。　○変化不測……自由自在に変化することができる。　○臨蓐……お産が近くなる。　○媼……年老いた女性。　○伎……技に同じ。　○委頓……疲れる、へとへとになる。　○嫩薬数葉……生えたばかりでまだ柔らかい、薬になる葉数枚。　○噴嚏……くしゃみ。　○便袋……物入れ袋。

問一　波線部①～④の読みを、現代仮名遣いにより、送りがなも含めてすべてひらがなで記せ。

問二　傍線部A・Cを現代仮名遣いにより、すべてひらがなで書き下し文にせよ。

問三　傍線部Bを現代語訳せよ。

問四　傍線部Dについて、この発言をした者はなぜこのように言ったのか。分かりやすく簡潔に説明せよ。